



「知る人ぞ知る」を超えた業績——「蛭沼寿雄著作選集」刊行を終えて

辻 学

(広島大学大学院総合科学研究科教授、学院史編纂室研究員)

「知る人ぞ知る」という表現がある。広く一般に知られてはいないけれども、限られた一部の人にはその存在や価値が認められているという意味だが、蛭沼寿雄先生（関西学院大学名誉教授、†2001年）の場合、新約聖書の写本という研究領域も、そしてその領域で生み出された数々の研究成果も共に、まさしく「知る人ぞ知る」ものであった。

蛭沼先生の没後10年となった今年、新約聖書本文研究に関する先生の業績を「蛭沼寿雄著作選集」全3巻（新教出版社）として発行できたのは、先生の学恩を受けた人間の一人として何よりの喜びである。昨年11月には、未刊のままになっていた『新約本文のパピルス』第Ⅲ巻を、同じく新教出版社から刊行することもできた。これらは、先生の「知る人ぞ知る」偉大な業績を、「知らなかった人にも知らしめる」ことになったかと思う。僭越ではあるが、今回の仕事に主たる責任を負った者として、一連の刊行事業を可能にして下さった方々への感謝を表す意味で、ここまでの道程を少し振り返り、この事業の意義を今一度確かめることにしたい。

もちろん、蛭沼先生のお名前を広めて称えるための刊行事業というようなことなら、先生は望んでおられなかったであろう。『新約本文のパピルス』および著作選集の刊行委員として私が願っていたのは、先生のお仕事が広く知られることによって、新約聖書本文の再構築という、地味で苦勞の多い、しかしそれなしでは聖書が成り立たない「知る人ぞ知る」作業の大切さが、聖書を読む人たちに広く認識されることであった。そして、その大切な作業が母校・関西学院の中で、世界に誇るべき水準でなされていたことを多くの人たちに知ってほしいという気持ちも強かった。

『新約本文のパピルス』第Ⅲ巻刊行に漕ぎ着けるまでのいきさつは、『学院史編纂室便り』No. 30（2009年11月25日発行）に書かせていただいたので、詳しくはそちらをご覧ください（インターネット経由で閲覧可能。<http://www.kwansei.ac.jp/gakuinshi/LEFT.htm>）、2009年の初めに、学院史編纂室の池田裕子さんから連絡をいただいたことで全ては始まった。池田さんは生前の蛭沼先生と特につながりがあったわけではない。しかし、『新約本文のパピルス』第Ⅰ巻と第Ⅱ巻を大学図書館で見、第Ⅲ巻をぜひ出すべきだと思い、原稿の在処を尋ねてこられたのだった。蛭沼先生自身や写本研究と関わりのなかった池田さんから出版の提案があったという時点で既に、「知る人ぞ知る」を超えていく道程が開けていたのである。もし池田さんからの問い合わせがなければ、私は第Ⅲ巻の原稿を保管したまま埋もれさせる大罪を犯すところであった。池田さんは、一連の刊行事業に際しての面倒な事務作業も引き受けて下さった。その献身的な奉仕なしには、この大計は決して成就しなかったであろう。ここで改めて心からの謝意を表したい。

さらに幸いだったのは、学院史編纂室の主任研究員をしておられた井上琢智経済学部教授（現学長）と、当時の編纂室長であった永田雄次郎文学部教授が、『パピルス』第Ⅲ巻の出版意義を認めて、専門が異なるにもかかわらず協力を申し出て下さったことである。こうして『パピルス』第Ⅲ巻刊行は、学院史編纂室の中で進められる、学院史を掘り起こすプロジェクトとして認められることとなった。お二人には大変感謝している。そして、（蛭沼先生の言語学分野での直弟子である）山本伸也教育学部教授、同じ新約聖書研究者である嶺重淑人間福祉学部准教授が刊行委員会に加わって下さったおかげで、一連の仕事を順調に運んでいくことができた（後にはさらに、新進の新約学者である前川裕氏が加わり、『パピルス』の面倒な校正や「著作選集」第3巻の解題を引き受けて下さった）。

刊行実現への最大の難関は、出版費用の工面であったが、多額の寄付をいただくことによってこれを乗り越えられた次第については、上述の『学院史編纂室便り』No. 30に記した通りである。刊行事業について広く知らせて下さった関西学院広報室、そして朝日新聞のおかげで実によくの方々から貴重な寄付金が集まった。蛭沼先生のかつての教え子や、新約聖書研究の関係者から温かいお志が送られてきたのに加えて、先生や写本研究とは直接関係を持っていないにもかかわらず、この事業の意義を認めてご支援を下さった方が多かったことには非常に励まされた。蛭沼先生の働きが広く共感を呼んでいることが実感できたと共に、優れた研究とは、その専門的内容に関わっていない人からも評価され得るものなのだと教えら

れる思いであった。募金の呼びかけ人を引き受けて下さった先生方、そして寄付を下さった皆様に、この場を借りて今一度厚く御礼申し上げたい。

『新約本文のパピルス』第Ⅲ巻は、上述の通り2010年11月に無事刊行されたが、私たちはこれに引き続いて、「蛭沼寿雄著作選集」の刊行に取り組むこととなった。これは、先生のご令妹である蛭沼喜代子氏からのご支援によるものである。

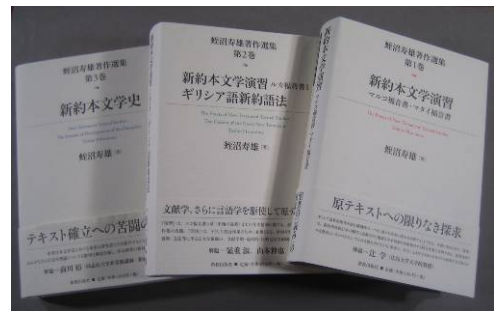
ご令妹が先生の遺稿のことをずっと気にかけておられるということは、折に触れて聞いていた。今回の出版事業を一番喜んで下さったのは、喜代子氏ではないかと思う。「著作選集」全3巻の刊行が成った10月のはじめ、刊行委員会を代表して山本伸也教授と池田裕子さん、そして私の3名が、発行されたばかりの第3巻を携え、報告とお礼を述べるため大阪府八尾市に喜代子氏を訪れたのだが、そこで驚かされたのは、相当のご高齢にもかかわらず頭脳明晰、会話にも不自由しておられないというそのお元氣な姿と共に、喜代子氏が蛭沼先生の研究作業をずっと傍らで実際に手伝っておられたという話をうかがったことであった。なるほどこれだけ優れた「助手」がついていればこそ、先生が単独であれだけの研究を文章化し、雑誌『新約研究』（新約研究社から発行）で毎月発表し続けることも可能だったわけである。

「著作選集」の第1巻と第2巻に収録した『新約本文学演習』（マルコ篇、マタイ篇、ルカ篇）と『ギリシア語新約語法』はいずれも、先生が個人で発行しておられた雑誌『新約研究』に連載された原稿を基に単行本化されたものだが、私費出版に近い形で発行されたため、広く知られるには至らなかったようである。第3巻収録の『新約本文学史』だけは、山本書店から出されたが、これも今日では入手困難となっている。つまり、分野の特殊性のみならず発行形態からしても、「知る人ぞ知る」存在だったこれらの書物を、広く知らしめる役割を今回の「著作選集」は担ったことになる。『パピルス』第Ⅲ巻に続いての発行を快諾下さった新教出版社のおかげで、本の宣伝を雑誌やネット上でしばしば目にする。

こうして蛭沼寿雄先生の業績は、「知る人ぞ知る」存在を超えることになった。それが実現できたのは、ひとえに多くの方々から寄せられたご助力のおかげだが、それも関西学院という枠の中で生み出された絆のゆえである。この絆こそが関西学院の強みではないだろうか。蛭沼先生の人徳とその研究水準の高さを抜きにしては、もちろん今回の事業は成らなかった。だがそれに加えて、学院の歴史の中にこのような優れた研究が存在したことの喜びと、その研究が正当な評価を受けずにいることを惜しむ気持ちを共有して下さった方々がこれほど多かったことに感動を禁じ得ない。それは、関西学院の持つ「絆力」とでも呼ぶべきものの現れであったように思う。世界最高水準の研究が関西学院から生まれていたことを明らかにし、その成果を広く知らしめた今回の刊行事業は、学院史の貴重な1頁を描き出したという点で、誠に学院史編纂室の中で進められるにふさわしい仕事であったと思うし、編纂室の支えがなければ果たせない仕事でもあった。おそらく学院史の中には同じように、関学が誇るべき業績でありながらこれまで十分な評価を受けて来なかった研究が存在することであろう。そのような、一般の目には触れにくいところで地道に進められた研究に光を当てて輝かせる仕事が、学院史編纂室の重要な働きとして今後広く認知されていくことを期待したい。それはまた、すぐに成果が見える、「役に立つ」研究ばかりに陽が当たり研究資金が優先的に配分されやすい昨今の風潮に対する反省にもつながっていくはずである。

蛭沼喜代子氏を訪ね、「著作選集」第3巻をお渡ししたことで、一連の刊行事業にひと区切りがついた。安堵の気持ちと、先生への感謝の気持ちが自然と湧いてくるのを感じながら広島に戻る、その帰路で思い出されたのは、新約聖書の言葉であった——「隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、人に知られず、公にならないものはない」（ルカ8章17節）。『新約本文のパピルス』第Ⅲ巻と「著作選集」が一人でも多くの読者に知られ、その素晴らしさが伝わるようにと願って止まない。

★「著作選集」第1巻の書評が『本のひろば』12月号（キリスト教文書センター）に掲載されました。引き続き、第2巻、第3巻の書評も掲載の予定です。



蛭沼寿雄著作選集 A5版上製 各4,410円（新教出版社）

- | | | |
|-----|-------------------------|--------------------|
| 第1巻 | 新約本文学演習マルコ・マタイ | 解題：辻 学 |
| 第2巻 | 新約本文学演習ルカ1
ギリシア語新約語法 | 解題：嶺重 淑
解題：山本伸也 |
| 第3巻 | 新約本文学史 | 解題：前川 裕 |



蛭沼先生が使っておられた「新約研究社」看板